HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「授業づくり」のFDプログラム開発を目指して
Author(s)	池田, 輝政; 井手, 弘人; 中井, 俊樹
Citation	高等教育ジャーナル, 10, 21-29
Issue Date	2002
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.10.21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29657
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P21-29.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「授業づくり」のFDプログラム開発を目指して

池田 輝政*, 井手 弘人, 中井 俊樹

名古屋大学高等教育研究センター

Creating a Faculty Development Program focused on Course Design

Terumasa Ikeda,** Hiroto Ide, and Toshiki Nakai

Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University

Abstract — The aim of this paper is to introduce the concept of course design and the effect of the faculty development program based on course design practiced at Kagoshima University in September 2001. We, the Center for the Studies of Higher Education, have developed teaching tips for Nagoya University. We emphasize the basic concept of course design in the teaching tips. The three points of emphasis are setting course goals, planning syllabus, and indicating student performance. The purpose of our faculty development workshop for the two-day program in Kagoshima University was to help participants understand the concept of course design through practices of writing teaching goals, a syllabus and assessment policy for a designated course. The effect of the program was significantly positive according to pre-post questionnaire answered by the participants. From the experience of the faculty development program in Kagoshima University, we suggest the importance of organizing a university system of faculty development programs focused on the course design concept and using an effective skill-based training program.

(Received on February 22, 2002)

はじめに－「北」と「南」からの刺激

大学設置基準の一部改正が行われて,教育改善に向けての組織的研修活動が大学に求められるようになった。これまでは自主的な研修の組織化に及び腰であった大学が,これを契機にその重たい腰をもちあげ始めている。これからは「授業概要やシラバスの公表」,「学生による授業評価」,「授業改善の講演会」という間接的な方法から,授業そのものの見直しと改善にかかわる直接的な研修プログラムが必要とされるようになる。

国立大学のなかでは北海道大学高等教育機能開発総合センターがこの面では早くから動いていた。阿部和厚氏のリーダーシップのもとに合宿型研修プログラムを開発して，部局の垣根を超えた全学的なFD（ファカルティ・デベロップメント）の実施を重ねてきているのは周知の事実である。

名古屋大学高等教育研究センターも，このような北大のFDプログラムや，京都大学高等教育教授システム開発センターの公開授業型研修活動などに学び

*）連絡先：464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学高等教育研究センター

**）Correspondence: Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University, Furo-cho Chigusa-ku, Nagoya 464-8601, JAPAN

ながら，同趣旨のFDプログラムを開発することを目標としている。諸般の事情もあって，当センターの平成13年度事業計画ではFDプログラムの開発研究を目標とはしなかったが，その開発に向けての準備は怠りなく進めてきた。

この過程で，幸運なことに，鹿児島大学共通教育FDワーキンググループから，9月28日から2日間の日程で合宿FD研修の企画と協力を依頼されることになった。鹿児島大学では，前年に北大の阿部和厚氏が講師としてFDタスクフォースの組織化と研修プログラム開発を指導し，その経験が研修ノウハウとして蓄積していた。

名古屋大学では，各期授業開始前に共通教育を担当する教官が一堂に会して，総長司会のもとに行われる「全学共通教育担当教官会議」が開催される。高等教育研究センターはその会議の中で１時間程度の講演型FDの経験を積んできた。また，我々は学内の部局・学科主催のFDや他大学のFDによる講演もいくつか経験してきた。しかし，一泊二日のような合宿型のワークショップ研修について，センターとして本格的に実施した経験はなかった。

そのような経緯もあって，我々は，鹿児島大学FDワーキンググループとFDプログラムの趣旨や目標などを交換する過程で，北大の合宿型FDの形と内容をベースにしつつ，新たに授業デザインの方法論に基づく「授業づくり」のプログラムを提案し，実践を試みることにした。まさに北海道大学と鹿児島大学，「北」と「南」からの刺激が我々の新たな挑戦をかきたてたと言ってよい。

詳細なFDの成果は鹿児島大学共通教育委員会から出されるFD報告書に委ね，本稿では，各大学が検討しつつあるFDプログラムづくりの参考に供するために，今回のFDプログラムに関して，①基本となる授業デザインの考え方，②FDの内容，③実践した成果，を報告し今後の課題を指摘する。

1.「授業づくり」へのアプローチ―授業デザインの考え方

多くの大学において，FD活動の焦点は現時点では授業改善になっている。授業改善だけがFD活動のすべてではないが，学生とじかに接する場であるクラスルームでの活動の内容が生産的にならなければ，他のすべての教育改革は形だけに終わることになるであろう。その意味では，授業レベルのFD活動には終わりはないし，新しい課題を加えながらこれからも継続されていくべきである。

名古屋大学高等教育研究センターのFD研究開発の原点も授業レベルから出発した。定評あるティーチングティップスを米国に学びながら，名古屋大学版として自主開発したのが平成12年3月に公表したウェブ版ティーチングティップス「成長するティップス先生」である。これは，新米の「ティップス先生」が四苦八苦しながら授業を進めるストーリー仕立ての「授業日誌」編と，授業の秘訣やヒントを授業の流れにそってまとめた「授業の基本」編の二つが主軸となっている(注1)。平成13年4月には出版物として玉川大学出版部から刊行し，全国の利用に供した（池田他，2001）。さらに平成13年12月現在では，名古屋大学ウェブ版を改訂（バージョン1.1）して，**図１**のようなアクセス画面の刷新，内容の更新と追加を行っている。

さて，「授業づくり」(注2)に対する我々のアプローチは，自主開発したティーチングティップスをあらゆる授業の場で使うことから出発する。我々にとって，ティーチングティップスとは「実践の書」である。ティーチングティップスの価値はまずはその有用性にある。その内容の有用性が常に授業というフィールドにおいて確認され検証される必要がある。さらに，ティーチングティップスとは「方法の書」でもある。その価値は有効性にある。その方法の原理やルールの有効性がさまざまな授業の場で常に認識され検証される必要がある。そのためには，「授業づくり」という営為を教育と学習の全体的な視点から，また時間と空間を含む総合的な視点から捉えることを忘れてはならない。このように，「授業づくり」にそったティーチングティップスの継続的改訂が今後の我々の課題と考えている。

以上のような課題を前提におきながら，ティーチングティップスの基本コンセプトとして我々が提案してきたのが，「授業デザイン（コースデザイン）」の考え方である。これは，①授業の目標と評価基準を設定し，②その実現の方法をシラバス（授業計画）として表現し，③そのシラバスにそって授業を進める，という考え方である。この考え方に立てば，授業づくりの研修テーマは，「『授業デザイン』の考え方を知り，それを表現できる『デザイン力』を身につける」ことからまず始めることになる。

授業デザインという考え方には，そのデザイン力の程度によって授業の成功が大きく左右されるという仮説が基本にある。授業の成功とは複雑な概念であるが, 簡潔に述べれば, 教師が設定した目標の実現度に対する判断である。その判断は教師自身が行うだけではなく，学習者の判断も不可欠となる。

2.「授業づくり」のFDプログラム－鹿児島大学での経験－

さてここからは，実際に鹿児島大学で我々がどのような「授業づくり」のFDプログラムを作ったかを述べていくことにしたい。

FD研修の目標は，まず「授業デザイン」の考え方を理解してもらい，つぎに具体的な作業を行うなかで「授業デザイン力」を身につけてもらうことにした。当大学におけるFDは，FD講演会と40名程度の合宿ワークショップの組み合わせであったので,「考え方」は講演会で,「デザイン力」は合宿ワークショップで身につけることを目標にした。ワークショップは合計８時間程度であり，二日にわたる時間配分にしてあったが, 我々は初めての経験であったので, その日程と時間量によってどこまで目標が達成できるかは定かではなかった。

むしろ，ワークショップの時間量は短いのではというのが事前の感覚であったので，時間量を有効に使うためには，参加者の議論や作業時間や発表時間などに多くを割き，講師側の指示はできるだけ簡潔な内容にして短くすることにした。

「授業デザイン力」については，どのようなスキルが必要とされているかを項目としてまとめたものが，次頁の**表１**に示す「授業デザインの７つのスキル」である。これは，平成13年3月に，授業づくりの支援ツールである「ゴーイングシラバス」(注3)（ウェブ版）



図１　「成長するティップス先生」名古屋大学版バージョン1.1のアクセス画面

を河合塾と共同で開発した際に作成した「ゴーイングシラバス・コースウェア」(注4)に掲載した。内容は米国の例（McCain, 1999）を参考にした。

授業デザイン力としての７つのスキルは，授業を担当する教師個人が自分の授業をつくる過程で身につけていくしかない。短時間の研修では多くを望むことはできないので，時間に合わせたショートプログラムを組むしかない。そのように考えて，我々は**表２**に示すような３ステップからなる「研修のポイント」を作成した。

参加者には各ステップにそって，授業目標→授業計画（シラバス）→成績評価という手順にそって授業デザインの課題を遂行してもらうことにした。各ステップのもとでは，参加者が具体的な作業を進める上で大切な留意点を列記し簡単な補足説明を行った。以下，各ステップでの要点を簡単に紹介する。

2.1　ステップ１―授業目標の立て方と表現の仕方

ステップ１は目標のデザインである。ここでは**表３**のような名古屋大学での初年次授業科目「基礎セミナー」で使用している例を示して，授業目標の設定と表現の要領を説明した。これは講師役の池田が開

表１　授業デザインの７つのスキル

① **組織のニーズを検討する**
　組織の求める目標を尊重し，自分の授業目標と関係づけることができる
② **クラスの特徴をつかむ**
　これまでの学習経験や獲得スキル，学習意欲，クラス規模などの情報を収集できる
③ **授業全体（コース）の目標，概要，計画を示す**
　学習者と共有したい授業目標，概要，計画を書くことができる
④ **授業方略を立てる**
　学習者に意欲をもたせるために，さまざまな授業方略を工夫することができる
⑤ **受講の前提条件を考える**
　学習者に求める事前知識・スキル・経験などを確認し，必要に応じて提示できる
⑥ **学習メディアの利用を考える**
　学習メディアをどう役立てるかを考え，必要に応じて活用できる
⑦ **授業の成果を評価する**
　授業目標の達成度を判断する情報やデータを収集し，次回に反映させることができる

表２　研修のポイント

ステップ１：授業目標の立て方と表現の仕方
　１．授業目標は３点にしぼる
　２．カリキュラムの全体目標との整合性をつける
　３．学生の視点に立った，読んで分かりやすいものにする

ステップ２：授業計画の立て方と表現の仕方
　１．ステップ１で定めた授業目標を達成するための学習手順を学生に示した内容にする
　２．授業時間外の学習を求める内容にする
　３．教師による一方向の講義の時間は勇気をもって短くする
　４．学生・教師双方にとって無理のない内容にする

ステップ３：成績評価の基準づくり
　１．評価基準（評価の観点）は先に示した「授業の目標」と一致させる
　２．上記の評価基準ごとに定量化にむけた具体的な評価項目をつくる
　３．成績評価の根拠資料（テスト，レポート，成果物，作品など）を決める

講している平成13年度の「基礎セミナー」の例である。

名古屋大学の「基礎セミナー」という授業科目は1年生全員に必修として履修させる専門への導入科目である。そのカリキュラム上の狙いは,「特定のテーマについて, 学生が, 参考文献や関係資料の検討, あるいはフィールドワーク等の調査研究を行い，その結果をまとめて発表し討議を行うなど，大学で必要な学習技能の基本を身につけ，専門教育での学習への準備ができるようにする」[注5]と説明されている。

表3の目標は，①基礎セミナーの組織目標（カリキュラム目標）と自分の授業目標との内容の一貫性をつける, ②「できないから身につけたい」という学生のニーズの視点を大事にする，③初年次生が読んでわかるように専門用語をできるだけ使わない，④成績評価の基準とするのでできるだけ欲張らない, に留意しながら表現した結果である。その結果は,「大学だけでなく，社会においても役立つプレゼンテーション力」という目標を設定し, その下位目標をさらに「自分を表現することを楽しむ態度」,「表現する内容をもつ」,「表現する技法をもつ」の3つに分けた。

とくに「1．授業目標は3点にしぼる」という指示は，多くの教師が目標を沢山かつ高く設定する傾向がある点に留意した結果である。目標を多くかつ高くすると, 授業についていける学習者は少なくなり, 成績判定で大量の不合格者を出すことになる。それでは困ると悩む教師は，目標を設定しなおすことよりも，事後の対応で成績判定を甘くすることを選ぶことが多い。しぶしぶ「仏教師」になってしまうのである。そのストレスを避けるためにも, 授業デザインではまず目標と評価基準の連動にこだわる必要がある。それが「目標は3点に絞る」という具体的な指示の狙いである。要するに，3点とは必要最小限で設定するという趣旨であった。

「2．カリキュラムの全体目標との整合性をつける」という指示は, 教師が自分の担当する授業のカリキュラム目標をほとんど意識しないで授業目標を考える傾向を前提にしたものである。ただし, このような教師の傾向は, 根本的には, 教育組織のカリキュラムデザイン力の貧弱さに帰することができるので, 今回の研修では，参加者にはそのカリキュラム課題の大事さを認識してもらう工夫も加えた。

2.2　ステップ2―授業計画の立て方と表現の仕方

ステップ2はシラバスのデザインである。シラバスは授業目標を実現する手順を簡潔に示したものであるから，その内容は授業担当者と受講者の間で共有されることが基本である。しかし, 日本では, どういうわけか，シラバスとは公表するものであるというメッセージが広まって，学習者にアピールするよりは社会の広報資料になってしまった。

参加者には,「1．授業目標を達成するための，学習手順を学生に示した内容にする」ことを指示した。これに加えて,「2．授業時間外の学習を求める内容にする」ことも求めた。各大学のウェッブ上で公表されている「シラバスらしきもの」を観察すると, その多くは教師が授業で話す内容を列記しているに留まる。自分が設定した目標をどのような手順で達成するのかのメッセージがそこにはない。目標達成に必要とされる学習活動や課題を明示する例も少ない。上の2つの指示はこうした現状を踏まえて作成した。サンプルとしては，**表4**のように池田の「基礎セミナー」の例を示した。

2.3　ステップ3―成績評価の基準づくり

ステップ3は成績評価のデザインである。ここでは,「1．評価基準（評価の観点）は先に示した『授

表3　授業目標の例

このセミナーでは，**大学だけでなく，社会においても役立つプレゼンテーション力を身につけること**を目標にします。プレゼンテーションとは，**自分を表現することを楽しむ態度，表現する内容**をもつこと，**表現する技法**をもつこと，の3つが大切です。これらはすぐに身につくものではありませんが，前期と後期の1年間をかけて身につけるようにしましょう。

業の目標』」と一致させる」ことを指示して，目標と評価基準とを連動させることを求めた。また「２．上記の評価基準ごとに，定量化にむけた具体的な評価項目をつくる」という事項を示して，評価基準の趣旨に合わせて定量的な評定が可能なように評価項目を立てることを求めた。

成績評価の基準を目標とはまったく離れて設定する授業担当者は圧倒的に多い。評価基準の設定と評価のための方法とを取り違えて，試験することが成績評価のすべてであると勘違いしているケースも多い。こうした傾向を視野に収めることによって，そうした単純で誤った評価の考え方が修正されることを参加者に期待した。

目標と評価基準の連動の意味を具体的に理解してもらうために，先に述べた池田の「基礎セミナー」の評価基準をサンプルとして参加者に示した。**表５**がそれである。表側には評価基準と評価項目，表頭には試験やレポートなどの評価方法を配している。表中の「１．表現する技法をもつ」に記した（70%）の意味は，この評価基準が合否判定の７割のウェイトであることを示す。一見して明らかなように，授業目標，評価基準，評価方法の関係はダイナミックである。

3. 成果

ここでは，上記のような「授業づくり」のFDを実践した効果について，我々が作成した「３Ｑシート」アンケートの結果をもとに述べてみたい。

「３Ｑシート」は，短時間の講演型FDで何ができるか、参加者の意識にどのような変化が起きたかを具体的に確認するために作成したミニアンケートで

表４　シラバスの例（一部分）

日　程	内　　容
4月17日	・担当教官，ＴＡ，受講者の自己紹介
	・授業目標，概要，シラバスの説明と確認
	→パワーポイントによる説明（10分）
	・この授業でのルールの説明と確認
	（→資料「授業のルール」）
	・情報リテラシーのチェック・テスト
	（→資料「情報リテラシー・テスト」）
	・チーム編成
	（→記入用紙「チーム名，連絡調整役１名，メンバー名」）
4月24日	・表現する技法を身につけよう
	パワーポイントの使い方：基本編Ⅰ（講義と実習）→静止編
	・課題Ⅰ：「ユニクロを知っているか？」について各チームは
	スライド５枚を次回に提出
	・チームの打合せとディスカッション
5月8日	・課題Ⅰの発表と講評およびディスカッション
	・チームでの修正と打合せ
5月15日	・表現する技法を身につけよう
	パワーポイントの使い方：基本編Ⅱ（講義と実習）→動作編
	・課題Ⅱ：「ユニクロを知っているか？」について各チームはスライド５枚を次回に提出
	・チームの打合せとディスカッション
5月22日	・課題Ⅱの発表と講評およびディスカッション
	・チームでの修正と打合せ
5月29日	・表現する技法を身につけよう
	シナリオ作成：基本編Ⅰ（講義）→表紙・背景・検証・考察
	・課題Ⅲ：「ユニクロはなぜ消費者の心をつかんだのか」について各チームはスライド４枚を次回に提出
	・チームの打合せとディスカッション

表５　成績評価基準の例

評価基準	評価方法 試験	レポート	成果物	発表	観察
１．表現する技法をもつ（70%）					
(1)パワーポイントのスライドを作ることができる			○		
(2)スライドに効果を入れることができる			○		
(3)パワーポイントを使って発表できる				○	
２．表現する内容をもつ（20%）					
(1)仮説・検証の方法にそって内容を表現することができる		○	○	○	
３．表現することを楽しむ態度（10%）					
(1)発表のための準備を楽しむことができる			○		○
(2)チーム発表での役割を積極的に果たすことができる					○

【成績評定】:(A)かなり優れている・(B)優れている・(C)合格・(D)不合格

表６「授業づくり」に対する認識の変化(注6)

	そう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	計
①　授業概要に対する認識					
【事前】授業概要について書き方がわからないので困っている	6(14%)	15(36%)	17(40%)	4(10%)	42(100%)
【事後】授業概要の書き方が理解できた	16(39%)	25(61%)	0	0	41(100%)
② シラバスに対する認識					
【事前】授業計画にそって授業を進めるのは難しいと思っている	19(45%)	15(36%)	7(17%)	1(2%)	42(100%)
【事後】授業計画にそって実際の授業を進めてみようと思った	26(63%)	13(32%)	2(5%)	0	41(100%)
③ 成績評価基準に対する認識					
【事前】成績評価の観点や基準の作り方が分からない	3(7%)	17(40%)	17(40%)	5(12%)	42(100%)
【事後】成績評価の観点や基準の作り方が理解できた	17(41%)	20(49%)	2(5%)	2(5%)	41(100%)

ある。質問内容が３問であるから３Ｑと名づけた。サンキューの語呂も合わせた。「３Ｑシート」は，①授業概要に対する認識，②シラバス対する認識，③成績評価基準に対する認識，の３点に焦点化している。認識の変化は事前３Ｑシートと事後３Ｑシートによって確認する方法にした。この「３Ｑシート」を合宿型FDで使ったのが，今回のケースであった。上記の**表６**はその集計結果である。

授業概要に対する事前の認識については，「書き方について迷う」(「そう思う」と「ある程度」の合計）と回答した比率が５割であった。事後では，「書き方が理解できた」とする積極的な回答が得られている。つぎに，シラバスに対する事前の認識は，「それにそって授業を進めるのは難しい」(「そう思う」と「あ

る程度」の合計）と回答した比率が81%にものぼる。事後においては，95%が「進めてみようと思った」の積極的な認識に変わった。この効果は大きい。最後に，成績評価基準に対する事前の認識は，「観点や基準の作り方が分からない」(「そう思う」と「ある程度」の合計）に47%が回答。事後の「理解できた」には90%が積極的な回答をした。総じて，事前と事後の認識に顕著な変化が生じたと判断してよいだろう。3Qシートの質問項目の作り方には改良の余地はあるけれども，こうしたアンケートが研修の目標に基づいて設計されるべきであることをここで確認しておきたい。

4. 今後の課題－「授業づくり」FDプログラムの開発をめざして

我々センターの課題とする今後のFDプログラムの開発について，今回の合宿型研修の経験を通して考え議論したことを以下に整理してみる。

まずFDの「組織化」の課題についてである。この点については名古屋大学の全学的な取組みもいまだ活発ではない。しかしながら，FDの組織化は急ぐ必要がある。その際にセンターから中期的なスパンで提案できることは，少なくとも以下の４点である。

(1)「授業づくり」のＦＤ組織化を教育改革のコアにすえる
(2) 重点（あるいは目玉）とする授業科目を定め，それに対して授業づくりの研修活動を組織化する
(3)「カリキュラムづくり」の研修についても組織化を視野に収める
(4)「授業づくり」あるいは「カリキュラムづくり」のリーダー研修を組織化する

(1)については，学生の授業評価やシラバス作成の義務化など教育改革の動きは進んでいるが，改革の中心となるのは「授業づくり」の部分であると考える。この「授業づくり」の部分を核にしながらに，我々センターは，ティーチングティップスや情報環境を利用した授業支援ツール（ゴーイング・シラバスなど）のさらなる改良と充実を図っていくべきだと考える。

(2)については，全ての授業を対象に「授業づくり」のFDを行うことは，既存の諸条件に照らしてあまり現実的ではない。したがって，例えば，必修科目や基礎科目などのカリキュラム設計のなかでポイントとなる授業科目を選んだり，大学が対外的に目玉として位置づける授業科目などを「授業づくり」のターゲット科目にするという考え方である。

(3)については，「授業づくり」をするためには，カリキュラム上の目標が明確に示される必要があるという点にかかわる。多くの大学では，教育の理念と目標について学習者にメッセージを伝えるカリキュラム設計の考え方が希薄で，科目区分や科目名の分類と担当者の授業負担量の配分という時間割編成に腐心する傾向がある。このような傾向では，授業担当者がカリキュラム目標を認識し自分の授業目標と一貫性を保つという誠実さは生まれない。「授業づくり」における目標のデザインとカリキュラムにおけるビジョンと目標のデザインは，そうした微妙で重要な関係にある。我々センターはカリキュラム設計の重要性を認識し，鹿児島大学のFDから約２か月後の平成13年12月25日に，名古屋大学の全学共通教育科目について，カリキュラム設計力のFDを初めて企画し実施したところである。

(4)については，FDは我々センターのような専門的組織だけではうまく機能するものではなく，全学のあちこちにFDの重要性を語るコミュニティが求められるという点である。そのコミュニティはネットワーク型で形成されてもよいし，一箇所に集まれるサロン型であってもよい。いずれにしても，コミュニティーをリードする人々の厚みが必要である。そのリード役の教員の厚みを組織するためのFDが検討に値するのではないかと考える。

つぎにFD研修スタイルの課題についてである。北海道大学や鹿児島大学などの合宿型FDスタイルはFDテーマに集中できる環境などさまざまなメリットがある。そのメリットの一つは，スキルトレーニングを中心に企画運営できる点である。講演や講義型のFDスタイルはオンキャンパスで実施できて参加者が容易にアクセスできるメリットがあるが，講師に依存しすぎる点が難点である。また，対象者が日常の業務をこなしながらの参加をせざるを得ないので，人集めに苦労する大学も多い。これからは，「授業づくり」のようなコアとなるべきFDについては，合宿型の作業ワークショップのスタイルがスタンダードになると考える。

おわりに

我々のFD活動はまだスタートラインに立ったばかりである。FDプログラムの開発や組織化も含めて行わなければならないことが山積している。専任4名の小さな当センターだけでは，山積する課題に対応することは不可能である。幸い，今回の鹿児島大学での経験によって，関係者との試行錯誤のなかではあったが，「授業づくり」のFDプログラムを具体的な形として残すことができた。今後もこうした大学間の交流を通してもっと多様なFDプログラムが開発され，その経験と知見が共有されることを期待したい。

注

1.「成長するティップス先生」のURLはhttp://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/である。

2.「授業改善」という言葉には，クラスルームでの学習者の行動や理解力などをコントロールする指導方法の改善というニュアンスがある。あるいは，「改善するというのは，自分の授業のどこか悪いところを手直ししなさいと言われているようで，抵抗感がある」という，以前筆者が受けた同僚教師からのコメントからもわかるように，どこかマイナスのイメージがある。そこで，言葉のもつ影響力を気にし始めると別の方向に議論が向いてしまう危険があるが，以下では，授業のプラス面や面白さがイメージできる「授業づくり」という言葉を使ってみる。

3.「ゴーイングシラバス」とは，シラバスを基点とした授業支援ツールである。ウェブのブラウザによって閲覧できるシラバスはもちろんのこと，学生との授業時間外におけるコミュニケーションを支援する機能（「お知らせ」「みんなの部屋」）や授業の成果・配布物などを整理しておく機能（「授業の記録」）がある。URLはhttp://gs.cshe.nagoya-u.ac.jp/。また出版物として名古屋大学高等教育研究センター（2001）『ゴーイングシラバスの開発　プロジェクト報告書』がある。

4.「ゴーイングシラバス・コースウェア」は，「ゴーイング・シラバス」を通して授業デザインの方法を用いたシラバス作成をするための教材的ツールとして作成した。URLはhttp://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/gs/course/index.html。

5. 科目の目標については名古屋大学（2001）『共通教育履修の手引き』に掲載してある。

6.【事前】部分のアンケートは平成13年9月28日のワークショップ開始直前，【事後】部分のアンケートは平成13年9月29日のワークショップ終了後に行った。【事前】のアンケートは42名，【事後】のアンケートは41名が回答した。いずれも鹿児島大学共通教育委員会及び共通教育室の協力を得て行われた。

文献

池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2001），『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集－』玉川大学出版部

McCain, D.V. (1999) Creating Teaching Courses, The American Society for Training and Development